上で、著名になつた「社會」と「協同體」との區別をいひ出したが、彼はジムメルとは全く見方を異にして、社會構成の型を、經驗的にとらへやうとしただけである。社會理性の批判といふのではなくて社會理性の體系をつくらうとしたのであつた。西歐の社會とドイツ的協同體との類型をならべて見たといふにすぎなかつた。それがたまたま協同體思想の高調の機運に乘じて、頓に著名になつたまでのことである。吾々は、科學としての形式社會學を考へるにあたつては、ジムメルを思ひ泛べることはもちろん、トェンニエスすらも、論外に置いてよい。むしろウィーゼ（L. v. Wiese, Allgem. Soziologie I-II, 1924-1929.）が、ほとんど沒價値的に、できるだけ形式的に、古典派經濟學の對象界を考察して、つくり上げた文字通りの形式社會學に注目すれば足るであらう。彼こそ、もつともよく形式社會學の面目をつたへた人だといはなくてはならないと同時に、この社會學が、主觀主義時代の學問として、必ずしも重要なものではないことを、考へざるを得ないが、古典派經濟學を、ただ「形式」にまで、漂白してしまつたともいふべき味氣なさはともかくも、彼は、關係論あるひは機能論（Beziehungslehre）として終始することができないで、さらに形態論（Körperlehre od. Gebildlehre）をこころみるに至つたことは、あきらかに體系的破綻だといはねばならぬ。かく二つの論をあはせ含む必要を感じてゐるところに、ドイツ思想と西歐思想との方法的對立の跡を看遁してはならないであらう。

## XI　經濟學における四つの學派（上）

### ——新古典派と後期數理派——

### 一

經濟學の方法が、自覺的になるにつれて、學派の意識もあきらかになるのは、當然といはねばならない。客觀主義時代には、古典派經濟學が支配的であつて、他の方法は、多少それの修正とか、補足とかを考へはしても、自らそれらとは獨立に、システムをうちたてやうとするまでに至らなかつたといつてよい。正統派（orthodox）に對して、異端（heterodox）がわづかな勢力を示したにすぎなかつた。ところが、主觀主義時代となれば、現實界において、主體性がつよくあらはれると共に、それを認識する主觀的な立場の反省が鋭くなつて來て、たとひ、同じやうに見える經驗的事象にしても、これを理解し、把握する仕方に、おのづから世界觀的な

差別が反映して、出來上つた世界像が異り、概念體系が相違するといふ結果を呈するのである。吾々は、この新しい時代において、ほぼ四つの學派を見出すことができると思ふ。もちろん、それらは、突忽としてあらはれたものではなく、おのづから生れ出ずべくして生れた、歴史的必然の姿だといはざるを得ない。すなはち、劍橋派あるひは新古典派（Neo-Classical School）、ローザンヌ派あるひは後期數理派、墺太利派、後期歴史派の四つの方向を數へることが出來る。これらの諸派は、それぞれ獨立したものではあるが、互にふかい關聯のもとに考へられなくてはならない。恰も、古典派をはなれて、歴史主義學說はあり得なかつたやうに、その由來においても、また問題においても、一つの全體をかたちづくるものといつてよいのである。いづれも、同じ經濟學の目的を、むしろ相互に補足するがごとくに、實現してゐるといふことができる。各學派は、自ら局部的な立場を守つてゐるとは考へず、全體は自家の方法によつてのみ把握し得べきだといふ自負をもつてゐるのではあるが、その展開の結果から見ると、かへつて補足し合つて、主觀主義時代の經濟學を充實せしめて來たと思はしめられるのだ。學派が、相刻し、反撥してゐる表面の事實をながめると、何のまとまりもなく、どこに主流があるのか、見わけもつきかねる場合が少くないであらうが、それにも拘らず、それぞれその力說する面を異にして、全體を豐富にしてゐるのである。もしかかる論理的役割をあへて逸脫するものは、それはもはや學派たる存在權を有しないもので、それを荷ふ一群の學者たちは、その學問の研究に何らの寄與もせぬ徒黨にすぎないことになるであらう。だから一見、相爭ふがごとき對立が、いかに全體の發展の裡において、その地位を保つであらうかを見定めることが、いはゆる歴史的・體系的な（historisch-systematisch）把握として、もつとも重要であり、方法史の研究にあつて深く心掛くべきところである。

ここで一言して置きたいことは、「經濟學に學派なし」といふ考へについてである。辛辣な物言ひをするパンタレオニ（1857—1924）が、經濟學を識る者の學派と、これをしらざる者のそれとの二つあるのみだ、ときめつけたことがある。もつとも彼によると、學派などいふものは、もともと「愚か者たちの厭ふべきシンヂケート」にすぎないのであるが（Palgraves Dictionary of Pol. Economy, vol. iii p. 710.）、これほどはげしく極めつけた場合は、しばらく措いて、經濟學において「學派」の對立を誘ふに至つたやうな、政治上の主義あるひは主張であるとか、哲學上の方法とかいふものを、この專門學から逐ひ出してしまふ方がよいといふ意見がある。たとへば Schumpeter にしたがふと、世界の主なる經濟學者たちは、みな同じ問題を見て居つ

て、そこにとり上ぐべき對象とか、それに處すべき方法とかは、歴然として思ひ迷ふ餘地のない筈なのだから、經濟學本來の課題にかかはりない事情に囚はれぬことにしさへすれば、物理學におけると同じく、學派のない純一なる科學になれるのだ、といふのである。經濟學は、歴史學なりやとか、歸納法と演繹法といづれがすぐれたりやとかの論議は（彼がシュモラー對メンガーの方法論爭に加へた前述の批評をかへり見よ）、經濟學にとつてよい刺戟とはならないで、ただ他の畑を荒し廻つただけであつた。「方法論的」研究の多數は、もつとも經濟學の進歩を促すべきCorrelation Measurement, Trend-Elimination などいふ研究のための方法とは、無關係な饒舌にすぎない。そのやうな無益な論文のために、ドイツの學術雜誌が、論說欄の四分の一乃至三分の一を割いてゐる現狀は、決して健全な傾向ではない、とシュムペエターは主張した（神戸商業大學發行の『國民經濟雜誌』昭和六年五月號所載、同教授稿「經濟學の現狀」參照）。いかにも、經濟學の專門家らしい考へ方であるが、經濟學に本來ならざる課題、たとへば形而上學あるひは政策上の立場に囚はれるといふ場合以外にも、尙ほ學派の問題があることを、シュムペエターは認めてゐない。吾々が、ここに考へやうとする學派といふのは、經濟學意識の發展の契機を指すものなので、たとへば物理學の場合についても、例外をなすものではない（Pierre Duhem, Ziel u. Struktur der physikalischen Theorien (1908), S. 364 ff., Ders. Die Wandlungen der Mechanik (1912). を參照せられたい）。いひかへれば、思考形式の相違にもとづく、理解する仕方の差別に由來するので、その差別は、やがて理解の內容を深めるに役立つて、方法意識の充實となるものなのである。思考の樣式の種々相は、世界觀の異るにしたがつてあらはれ、時代の變化に伴つても生ずるであらう。同じ科學の營みにしても、英・佛・伊・獨・墺などそれぞれに、その態度方法のうへに特色がある。方法意識の歴史形態が異るところに、學派があらはれてゐるので、必ずしも、經濟學者が他の事情に左右せられた結果だといふわけにはいかぬ。認識にあたつて、さまざまの觀點があり、眞理の把握に異つた道行きがあることは、爭ひがたき事實であつて、たとひ同一の現象をとらへるにしても、その觀點の異るにつれて、等しからざるシステムが出來て差支はなく、またさうでなければならぬであらう。たとへば „Idealtypus“ といへば、吾々の間では、相當にやかましい方法上の問題と考へられてゐるが、これを單純に “Sampling“ といふやうに手輕く片づける人もあるのだ。その思考樣式の如何によつて、科學の性狀までも變はるであらうことは、想像にかたくはない。かかる意味における方法上の差異が、問題のとらへ方までを變じて、一方の經濟學者の見のがしてゐる境を、他方の人々がよく描き出

すといふ補足的效果をさへ、もち來すこともまたあり得べき場合である。經濟學に學派はあつた、そしてあるべき筈のものである。

## 二

客觀主義時代を獨占したといつてもよかつた古典派經濟學を、直接、この新なる時代にうけつぐものは、劍橋派とローザンヌ派とである。これは、西歐の實證主義思想を代表してゐるものだといつてよい。そして、そのうちにあつて、劍橋派に多少の非合理主義的志向をみとめ得るのに對して、ローザンヌ派は、きはめて合理主義的であり、實在論的だといふことができる。英佛の相異をあらはしてゐるといひ得るでもあらう。以上の一組に對して、ドイツ理想主義思想にしたがふ一對は、墺太利派と後期歷史派とである。前者は、フランスの合理主義的にして實在論的なる場合に相應してゐるものがあり、後者は、イギリスの如くに、非合理主義の志向を含むものがあつて、よい對照をなしてゐる。かやうに、四つの學派は、英佛と獨墺との二對にわけて、考へることが出來るのであるが、またその志向において、非合理主義的なものを含む劍橋派とドイツ歷史派とは、他の二學派にくらべて、著しく倫理的色彩が濃く、社會政策的な思想動機がつよいので、その限りでは、ローザンヌ派と墺太利派とは相結び、合理論的精密をめざしてゐるのだ。いひかへれば、世界觀のうへでの區別と、問題のうへでの對立とが、交錯してゐる趣がある。たしかにシュムペエターのいふごとく、世界の主なる經濟學者の觀てゐる問題は、大體において變りのないものだが、その重心の置くところが、志向の相異や、現實の必要などにもとづいて、必ずしも一致するものではない。ただここにいふ四學派の觀點を網羅すれば、近世の社會經濟に對する理論的把握は、まづ遺漏なきを期することができると思はれるので、そこに、それらの學派の存在權があるといはねばならない。

劍橋派の開拓者たるアルフレッド・マーシャル（一八四二—一九二四）は、恰も客觀主義時代における「理論經濟學の創始者として」知られてゐるリカルドの如き地位を、新しき時代において保つべき人である。實際、彼によつて、經濟學は生れ變つたのだ。リカルドでの變化にまさるとも劣らぬだけの大きな革新が、マーシャルの靜かな、着實な提言によつて、着々とすすめられて行つたのである。深く味はふとしない人たちからは、リカルドの註釋家ぐらゐに取扱はれる危險があつた。今日でもさう考へる人がゐないとはいひ得ぬであらう。出來るだけ從來の學說を展開せしむることによつて、問題をふかめてゆかうとする態度は、そこに舊態依然たる

ものがあるにすぎぬとさへ思ふでもあらう。しかしマーシャルの努力の方向は、A. C. Pigou, J. M. Keynes のごとき、すぐれた頭腦によつていよいよ充實せしめられて、劍橋派の方法が確立され、「新古典派」の威容は、いはば押しも押されもせぬものとなつた。マーシャルは、夙にカントに傾注し、またドイツ留學の間に、ヘーゲルの歷史哲學に深い關心をもつたといふ閱歷があるが、元來、數學を志し、のち形而上學乃至倫理學に心をひそめた人で、その問題をふかめるために、經濟學研究に進んだのであつた。彼が、社會倫理のうへに新なる秩序をうちたてることを、いかに熱心にのぞみ、且つ努力したかについては、他の機會に述べたから（拙著『經濟倫理の構造』昭和十三年刊行、一六七頁以下參照）、ここにはのべないが、今當面の問題となつてゐる經濟學の理論的方法に關する彼の足跡を考へて見やう。彼もまた、メンガーと同じく、精密科學としての經濟學をみちびかむとした理論家であつたが、新なる方法を、quantitative analysis（定量分析）によるものとし、古典派の考へは、qualitative analysis（定性分析）に他ならぬとした。これは、利用厚生の既成條件の吟味に慊足らずに、その運動變化の跡づけをなすために必然的に要請された方法だと見てゐるのである。いひかへれば、古典派にあつては、「自然的調和」あるひは自然的秩序にもとづく全體の構成が、いはば與へられたもので、そこに、あへて自ら社會活動を、連續態として構成することにつとめる必要がまるでなかつた。だからいはゆる「經濟的調和」を前提して、その自明ともいふべき內容を分析すること以外に、經濟學者の爲すべきことはなかつた。靜態觀だけでよかつた。ところが、かくの如き「調和」ある宇宙秩序に對する信賴がうすらいで、たえず、利用厚生の實現に關する變化を測定することを、つとめなくてはならぬこととなつた。そこに動態觀が必要になつて來たのであるが、この變化は、各個人の主體的活動の連續として、考へられねばならぬ。さまざまな方向をもつた運動の合成として、かの「自然的調和」を、主體の立場から再構成して見やうとするのにも等しいものがある。ただ、すでに信ずるにあたひしないといつて捨て去つた世界像であるから、もう一度、自分たちの努力の間からつくり出して見やうとしたところで、かつてあつたやうな形ちで生れ出る筈はない。むしろ變化の傾向の微分的省察によつて、わづかに全體的なるものを髣髴せしむるといふ他はないのだ。その場合にさへ、數學的方法の妥當を考へ得るために、「萬有は飛躍せず」との連續の假定をつくつてゐる。何によつて、かかる連續が可能となつたかは、劍橋派の問ふところではないが、數學的方法の妥當をつよく考へる場合には、そこに形而上學的なるもの（Metapsychisches）を、おもはねばならなくならう。マーシャルは、數學的

處置を强行することが、經濟學ならびに社會哲學にとつていかなる歸結をみちびくかを、何人よりもよく知つてゐたらしく思はれる。彼の門下の一人 Prof. C. R. Fay が、思ひ出をのべた最後のところで、「余は、數學となると一向文盲の方なのだが、ある時、その話が出たことがある。するとこの偉大な數理經濟學者は、今日では、經濟學における數學は、ずゐぶんゆき過ぎてゐると、吐き出すやうに、言ひ切つたのである。爾來、余は、この言に大いに安心を見出してゐるのだ」(Memorials of Alfred Marshall. p. 77.)とあるのは、フェー教授個人の經驗としてのみ考ふべきことではあるまい。おそらくマーシャルが語つた不當な擴充は、彼の後繼者といはれるピグーにおいても見出されたといつてよいであらう。そして、それは、一般に數理經濟學なるものの存在權について、思ひ合はされなくてはならぬ問題である。劍橋派は、數理を中心として、經濟學をうちたてやうとしたわけではなく、マーシャルがいつてゐるごとくに、厚生目的への適宜性をふかく藏した、經濟生物學的構成をねらつてゐたものであつた。だから數學的方法の妥當には、おのづから限度がある筈なのである。對象界を、數學的處置にたえ得べきやうに、一つの連續體につくり上げることが目的ではなくして、ただ厚生のための生物學的機制のもつべき「經濟的調和」を測定する方便にすぎないのである。この變化をはかるための方法乃至手段自體に、かつての自然的秩序の形而上學に代はるべきほどの重要な役割を豫想したといふことは、多少問ひをもつて答としたかの感をいだかしめるものがあるが、そこに、吾々が、マーシャルはじめ劍橋派の態度が、よく新しき時代の思想動機をあらはしてゐる所以を見出すべきだと思ふ。いひかへれば、經濟學の中心問題を分配に見た古典派的傳統を重んじながら、それを深めて、社會的正義の問題たらしめ、正常的關係のオルガニズムをおもひうかべながら、これをできるだけ、合理的計算の對象として取扱はふとしたものであつた。そこに、經濟學を、單にサイエンスとしてのみならず、アートとして考へ、厚生經濟學 (Economics of welfare) と觀た理由がある。恰も後に述べる數理派と墺太利派と後期歷史派とを、ともかくも一つにあつめたといふやうな、方法上は二重にも三重にも不齊合を含むものであるに拘らず、經濟學にとつて肝要なるあらゆる問題に關心をもつといふ建前で、倨然として學界にのぞむものこそ、新古典派の面目である。かつての古典派が、さまざまの視角から深化され、合理化されて行つたが、新古典派も亦、この主觀主義時代において、よくいへば問題の淵叢であり、わるくいへば、よろづや式に、幾多の方向をかかへこんでゐるのである。したがつて、他の三つの大陸の學派は、このイギリス派を、分化せしめたものといひ得ぬこともないのだ。いづれに

もせよ、經濟學を究めんとする人は、まづもつて劍橋派乃至新古典派の所論に耳かたむけねばならない。斯學の大宗は、依然として「正統派」の誕生したところにある。

## 三

數理に關心をもつ經濟學者を、數理派といふのではない。また況んや數學的表現をもちゆる人々を、かく名づけるべきではない。その標準で考へたならば、かなり廣汎なものとなるかもしれない。吾々が、ここに特に數理派 (the mathematical school) とよぶのは、經濟學の認識對象を數理的な構成體として考へてゐる經濟學者の一派を指すものである。だから數學的方式を採用すると否とは、第一義的な重要性をもつものではない。經濟そのものの對象性が、數理界とか、物理界とかにも擬すべき合理的な意味合のものだ、と確信してゐる人々は、いづれも數理派に屬するものといはねばならぬ。かやうな志向をいだく經濟學者は、すでに客觀主義時代にもゐた。われわれは、その人たちを假りに、前期數理派とよぶこととし、Cournot (1801—1877), Dupuit (1804—1866), A. A. Walras (1801—1866), von Thünen (1783—1850) の名をそこにつらねてよいであらう。これに對して、主觀主義時代の數理派における代表的な學者としては、W. St. Jevons (1835—1882), Léon Walras (1834—1910), V. Parato (1848—1923), F. Y. Edgeworth (1845—1926), M. Pantaleoni, Irving Fisher, Enrico Barone, Joseph Schumpeter などを記憶すべきであらう。この後期數理派のうちにも、段々の變化があることは、いふまでもないが、少くもそこにクラシカルな段階と新なる動きとが見分けられる。したがつて數理派の全般の發達をながめると、靜態觀に終始する前期と動態觀をもとめてゐる最近の傾向と、その中間にジェヴォンス、ワルラスらのごとき限界利用理論による主觀化の階梯があるといふやうに三段にわけて考へられるのである。

すでにマーシャルがいつたやうに、やり過ぎの甚だしいもの (much overdone) であるかもしれないが、數理經濟學の方法については、幾多の疑問がひそんでゐるのだ。さてこの觀點によつて、恰も天文學におけるニュートンにも比すべき問題の設定をなしとげた最初の人は、レオン・ワルラスであつたと、その後繼者たるパレトオがいつてゐる。それは、おそらく誤りではないであらうが、この人々によつて表象された世界像は、いはゆる靜態均衡であつた。そこでは、生産のためになされた寄與の全價値が、生産物の總價値に合致するもので、同じ市場では、同種の商品について、一定値段があり得るのみで、その價格は、需要と供給との量的適合

と共に、賣手にも買手にも、最大多數の最大滿足を約束するものである、といふことに考へられてゐるのである。したがつて、かかる均衡は、欲求の滿足と、その充足のうへでの障害との反立が、一應止揚せられた狀態をあらはしてゐるのである。いひかへれば、何らか、能動的な選擇をあへてしやうとする關心の熄んでゐる狀態である。これは、日常一切の經濟活動が、到達せむとしてしばらくも怠らない目標だと考へられる。かつて古典派經濟學は、大體において市場經濟は、刻々にこの目標を實現しつつありとの安心のもとに成立つてゐたが、立說の根柢においてそれと果して幾何の差異があるであらうか。Frédéric Bastiat (1801—1850) の考へた樂天的な "Harmonies Économiques" と相通ずるものを思ふことなくしては、一般に均衡をおもひ泛べることは、不可能ではないか。吾々は、たえざる不均衡を目擊し、不合理を經驗しつつある。かかる不調和の相つぐ間に、想念上、たがひに相反する運動の方向の結合から、からうじて、一つの靜止點を概念しうるにとどまるのではないか。獨樂の廻轉をながめて、それの逆の方向への廻轉を考へたとき、いはば折返し點において靜止が、思ひもうけられるといつたやうなものではないのか。かかる靜止せる獨樂は、ただ動いてゐる獨樂によつてのみ概念し得るところであらうが、靜態均衡も、ただ動態の折返し點としてのみ、わづかに考へらるべきものにすぎまい。それにも拘らず、これをまづ措定して、それを妨げる事情を檢討しやうと企てることは、古典派の自然價格の形而上學と、何らえらぶところがないのである。變化する過程の裡に、それらの變化の歸趣を、また發展的意味をあきらかにせむとつとめて、いはば動中に靜をたづねむとする方法が、數理派の新らしき志向となつて來てゐることは、まことに理由ある次第だといはねばならない。たとへば、企業家の創意といふごときものを、靜態均衡の破壞する非合理的要因とは考へずに、資本主義的發展それ自らを、全體として理解し、その經濟性の充實をあきらかにする方法をとらうとしてゐる。これは、同じく數理的方法を驅使しながら、福祉あるひは厚生のメカニズムをとらへやうとつとめる劍橋派に歸一すべき約束をもつものだといつてよいのだ。

また主觀主義時代の數理派において、限界利用理論が重要視せられるに至つたが、この立場では、當然に「感情の大いさの測定可能性」が注目されることになつて來るが (Otto Weinberger, Die mathem. Volkswirtschaftslehre, 1930.)、ジェヴォンスにあつての大量觀察にもとづく客觀的表現の可能とか、パレトオにおける間接的測定の可能とか、いふことは、總じて主體性を看失つた結果だといはねばならない。墺太利派の Böhm-Bawerk によると、吾々の欲望が、

實際通約の出來ないものだとすれば、一切の經濟は不可能に陷らざるを得ないが、經驗の教ゆるところによれば、主觀的な感受や希望を、日々刻々に、相互に計量してゐるのだといふのである。浴みする、シンフォニーをきく、食慾をみたすといふやうな、全く異つたもののいづれを、ある瞬間に最大とするであらうかは、よく正確にわかつてゐる。この建前をすてて、個々の享樂について、客觀的測定をこころみたところで、決して正しい經濟に達することはできないであらう、といふやうに、バヴェルクは考へてゐる（Positive Theorie des Kapitals. I〔1921〕S. 247—54, I. S. 205—225.）。これは、全く主體の觀點から實踐の理論をかたちづくらむとするもので、數理派の人々のいふごとき場合は、その主體性がつよくあらはれずに、とかく現象の理論に傾くものといはねばならない。かやうな現象理論への還元は、ややもすれば主觀主義時代の方法を、前の時代に逆戻りさせることにもなるであらう。數理派の方法は、客觀的精密をのぞむの餘り、主觀的精密性ともいふべき新なる內面的把握の妙趣を、逸したることなしとせぬのである。

# XII 經濟學における四つの學派（下）

## ——墺太利派と後期歷史派——

### 一

限界利用理論を重視することは、前にのべた劍橋派にしても、また後期數理派にしても、變りはないが、特に墺太利派において著しいものがある。もともとこの理論は、一學派の問題ではなく、經濟學の方法についての自覺とともにあらはれた、臆說ともいふべきものであつて、主觀主義時代の經濟學者にとつては、ひとしく思索の中心となるべきものなのである。メンガーはもちろん、ジェヴォンス、ワルラス、マーシャルなど、この專門學に一紀元をもち來たしたほどの人々は、みな同時代にこの理論をあみ出してゐることによつても、この間の消息がうかがはれると思ふ。しかし限界利用の考への根柢をふかく看拔いた立說は、メンガーの共鳴者たちから成る墺太利派によつて爲遂げられたものといつてよい。そこでは、「經濟すること」の內面的原理のあらはれとして、限界利用の理論が考へられてゐるので、主體を中心として觀

てゐるところに、限界效用の大いさを客觀的に取扱はふとした他の學派の考へ方とは、著しく異つたものを示してゐるのである。この傾向をもつともよく代表して、墺太利派のために萬丈の氣を吐いたのが、ボェム・バヴェルク（一八五一—一九一四）であつた。彼によると、欲望と財との充足關係にあらはれる度合あるひは段階によつて、限界利用理論の構成が考へられるので、これを經驗上の事實として見れば、いはゆる「怜悧の法則」であり得るし、理論的な構造からいふと代位補充の關係となるであらう。この代位補充といふことは、大にしては社會經濟の全體、小にしては各個の經營の秩序とわかつべからざる關聯があるので、さきにメンガーの天才的な着想として說明した「財の次元」の考へが、具體的な經驗としては、財の充用における代位補充となつてあらはれて來たのである。たとへばマーシャルのあげた有名な例をもつてすれば、今一人の番人をふやすことによつて、年に若干頭の羊の喪失を免れ得るとした場合に、その番人のために支出すべき報酬と羊について蒙るべき損害とを比べて、番人を置くべきかどうかを決定する。かかる場合に、ただ客觀的に限界效用の評量として觀ることも出來るであらうが、また經營における合理的精神の表現として解釋することもゆるされる。バヴェルクは、この主體的な內面性を强く考へる建前をとつた。彼の形容をかりると「內に燃ゆる光が外を照す」のである。「つねに經驗のうちに確固たる根柢を有する」純粹な機構によつて、外界にあらはれる雜多な現象を、とりさばいてゆかうとする。この經驗に內在する純粹な合理性をもとめる方法は、一般に墺太利思想の學問的態度ともいひ得べきもので、經濟學のみに限らず、たとへば哲學說のうへにも充分窺ふことの出來る傾向だと思はれる。さきにメンガーとマイノングとの交涉に關說したが、マイノングと共に哲學史上重要な意義を有する Fr. Brentano にせよ、また Ehrenfels にせよ、いづれも、經驗のうちに對象的に、また實在的に、純粹なる機構をもとめやうとする心理學的合理主義の方法に、立脚する人々であつた。そこにドイツ哲學とは、おのづからに異色のある問題と方法とを展開するに至つて居る（たとへば Howard O. Eaton, The Austrian Philosophy of Values, 1930. を參照せよ。なほ拙著『經濟哲學の基本問題』一四六頁以下に、多少の說明をこころみた）。しかしバヴェルク自ら「抽象なくして理論はあり得ない」といつてゐるやうに、抽象的普遍的な說明をあへてするところから、古典派と同じ理論を說くものだといふやうに、誤解され易い。彼自身いふところの遊離法（Isolierende Methode）といふ名だけを見ると、經驗を無視した架空論に走るものかとさへ思はせるが、これは、實は純粹經驗の方法とよぶべきものであつた。たとへば、彼が、その著名な利子理論において、根本命題

としたものは、「現在財は未來財より價値大なり」といふのであつた。「手の中にある一羽の鳥は、森の中にある二羽の鳥にまさる」といふのと、何の變りもないではないかと反問したくなる、この命題にしても、彼自身は、現實の經濟社會における利子現象を、「遊離法」によつてとらへた結論であつたのだ。それは、立ちならぶ電柱の近いものは大きく、遠いものは小さく見えるといふほどの視覺上の經驗の記述とえらぶところがないと、きめつけられさうでもあるが、彼にとつては、經濟機構における財の價値次元の隔りを、できるだけ、經濟する主體の內的經驗のかたちであらはさうとしたのであつた。ボェム・バヴェルクは、「マクロコスモスを認識せむとするには、ミクロコスモスを理解しなければならぬ」と考へ、國民經濟の動きを支持すべき合理性を、直接且つ純粹に、個人的な經濟經驗のうちにとらへることをこころみたのである。これは、いふまでもなく、實踐の內面法則として「經濟性」を理解しやうとする盡力に出たものであつた。彼は、メンガーの方法觀をもつともよく、その深さにおいてうけつぎ、またこれを縱橫に驅使して、經濟學說の建立につとめた人であつたが、彼ほど、その內面性の把握にすぐれた經濟學者は、墺太利派にあつても類がない。その數多くの方法論に關する論說は、よくこの學派の立場をあきらかにしたものであつたと共に、また經濟學が、實踐の理論としていかに考察さるべきかについて、極めて示唆に富む見解を藏してゐるものであつた（特に彼の論文集 Ges. Schriften von Eugen von Böhm-Bawerk, hrsg. von Fr. X. Weiss, 1924 中の第二章の論明を參照されたい）。

しかし彼以後の墺太利派の展開は、むしろ數理派への接近をおもはしむるに至つたほど、客觀理論の相貌を呈したといふところから考へると、ボェム・バヴェルクをもつて、此の學派を代表させることには、なほ考慮の餘地があるといつてもよい。すなはち吾々は、彼れと同じ年に生れて、彼れより少しく長命であつた Friedrich von Wieser (1851—1926) が、ひとしくこの學派の重鎭として、多少とも客觀理論を重んずる學問的態度の人であつた事實のうちに、その後の墺太利派を支配した傾向の端緒をたづねてもよいであらうと思ふ。Hans Mayer, Ludwig Mises, Joseph Schumpeter, Rozenstein-Rodan, F. A. Hayek のごときすぐれた墺太利派の學者たちは、いづれもみな多少とも、ボェム・バヴェルクのつよく主張したとおもはれる主體性の內面的原理からは、はなれて、むしろ現象理論に近づいてゐると思はしむるものがある。すなはち價値原理を合理的精神の流動性において具體化することを工夫したバヴェルクの實踐哲學的な純粹さにもとづいて、經濟理論をつくり上げやうとする要求は、彼以後には、あまりす

ぐれた代表者をもち得なくなつて、おほむね客觀的な數理派的構想に傾いて行つて、たとひメンガーの重要を說く場合にも、バヴェルクによつてうけつがれた志向に對しては、比較的に冷淡である。おそらく彼のごとくに、實踐的なるものを、あくまでも對象的に、理論的に取扱ひながら、實踐の生動せる味ひを失はぬやうにするといふことは、特異なる天才のみよくする學問的方法であつて、他の追隨をゆるさぬ境地だといつてもよいであらう。墺太利派は、やはりしだいに內面性への顧慮をはらひつつも、客觀的現象理論に落着いて、後期數理派とむすびつく可能性において、劍橋派に似通ふものがあるといひ得やう（Wirtschaftstheorie der Gegenwart, Bd. II. Wien 1928 を參照せよ）。

## 二

ドイツ後期歷史派は、大體において、二つの流れをつくつて發展した。その一つは、歷史的勞作に精進する分派であつて、シュモラーをはじめ Adolf Held, Lujo Brentano のごとき人々が屬してゐた。他の一つは、社會學的傾向を示す研究者の一群であつて、Karl Bücher, Max Weber, Werner Sombart をあげることができやう。しかし何れも決して單に經濟史とか、社會學とかに沒頭するといふ類ひの人々ではなく、みな經濟學理のうへに多大の關心をいだいてゐたので、その共通の目標とするところは、社會倫理の問題であつた。分配の正義についての具體的把握をめぐつて、多角的な研究をすすめることが、これらの人々の仕事であつた。それぞれ重點の相違はあるにもせよ、全體としては社會經濟の倫理化が、この後期歷史派の共通の課題をなしたものと見ることは、必ずしも不當ではない。この倫理化運動の中心觀念が、遠くドイツ固有のメルカンチリズムともいふべき官房學（Cameralwissenschaft）に、その歷史的淵源を負ふものといはなくてはならぬ。すなはち十八世紀末以來、西歐の經濟學が移植されて、自由主義思想の流行を見るに至つて、しばらくこの舊い經濟行政のための政策學は、朝野の識者の關心から後退を餘儀なくされてゐたが、十九世紀の六十年頃からはじまつた國民史の研究に刺戟されて、再び頭をもたげることになつたのである。この改新せられた實踐學こそ、後期歷史派の指導精神たる「社會政策」の思想的根幹なのだ。一八七二年、いはゆる講壇社會主義（Katheder-Sozialismus）を支持する學者たちによつて、社會政策學會（Verein für Sozialpolitik）が結成された（爾來六十年にわたつて存續し、數年前解散されたが、吾邦にあつても、周知のごとく、近年まで同趣旨の學會があつて、社會立法の研究、促進につくすところがあつた）。この講壇社會主義者

たちの先導をつとめたアドルフ・ワグネルは當時三十七歳であり、またグスターフ・シュモラーは三十四歳であつた。いづれも少壯有爲の學徒が、憂國の情をかたむけて、社會倫理の革新にのり出したのであつたが、その動機が著しく實際的であつただけに、その學者的勞作は、おほむね國民社會の實情に關する實證的な研究であつた。たとへば「イギリス社會史」をもつて有名なアドルフ・ヘルトは、「余は、ドイツ人として、ドイツ人のために、イギリスについて敍述する」といつてゐる。この點においては、客觀主義時代の歷史主義經濟學者と、さしたる相違はないといつてもよい。かつて、ヒルデブラントが一八六三年、『國民經濟學及び統計學年報』をはじめるにあたつてのべたところは、ほぼシュモラー以降の人々の所懷と大差はない。曰く「各國民の經濟は、その言語、文學、法律、藝術とならんで、その文明生活の一方面であつて、それらの諸文化領域におけると同じく、自然法則によつて定められた範圍內に、人間精神の自由と勞働との所產が見出されるのである。したがつて時と場所とを問はずに、普遍的抽象法則を樹立するわけにはいかぬものであつて、夫ぞれ發展の跡をたづねて、現代が人類發展のうちに加ふべき一鐶を見出すにつとめなくてはならない。經濟史研究の必要もここにあるもので、それはまた現代のためのものでなくてはならぬ」と。そのいふところの自然法則によつて定められた範圍とは、彼の考へた「發展階段」を指すものである。經濟上にあつて、自然經濟、貨幣經濟、信用經濟の三階梯は、各國民を通じて、自然必然的な過程であるが、國民によつて、同じ階梯にあつても、その活動の仕方に異るものがあるところに、實證的研究によつて明かにさるべき餘地がある、そして、そこに實際的必要との結びつきがあるといはざるを得ない、といふやうに見てゐるのである。このヒルデブラントの考へは、いふまでもなくメンガーにおける事實形態（リアルテュペン）の方法に相應するものであり、またウェーバーにおける觀念形式（イデアルテュペン）の方法の先蹤だといつてよい。しかしシュモラーその他の歷史的研究には、ヒルデブラントにおけるほどの類型化の試みすら、全くあらはれてゐない。資料の限りなき穿鑿が、ほとんど何のためであるかをかへりみる暇もなくつづけられて行つたのである。そこにメンガーのいふ「歷史主義の誤謬」ともなつたのであるが、もしこれだけが、シュモラー一派の努力の全貌だと解釋するならば、それはおそらく餘りに淺薄な、あるひは同情なき斷定だといはねばならない。すなはちこの派の人々にとつては、資料の蓄積は、「嚴密にして且つ精密なる科學」（Strenge u. exakte Wissenschaft）への缺くべからざる前提であつた。經濟學を、倫理性によつて基礎づけられた分科たらしむべき必須の要件として、先づもつて、

國民生活の實相を克明にしらべやうとしたのである。その倫理性は、分配の正義の原理（Prinzip der verteilenden Gerechtigkeit）にあつた。そこには、メンガーのいふ「經濟性」などよりは、はるかに廣汎な一般原理がかかげられてゐるが、ただこれを特殊的に限定して、各國民の經濟活動を組織だてるに役立つやうな、道行きがあらはれてゐない。究極の理念と、偶然とも見ゆる事情とが、別々にあたへられてゐて、それを媒介し、合理化すべき方法を缺いてゐる憾がある。理念の具體的妥當を示すべき客觀的過程が、全く出來上つてゐない。ここに、「社會政策」の方法學的難點が横はつてゐるのだ。かかる困難は、劍橋派における「厚生經濟學」の思想にも、ひとしくあらはれてゐるところであつて、その認識論上の脆弱性は、新古典派に屬する人々のうちからもすでに指摘された。シュモラー等の倫理性と厚生經濟學者の福祉とは、人間生活に關する學問を營む者の、つねにかへりみるべき理念を指向してゐることにおいて變りはないが、しかも、これを特に經濟學の對象として限定して、よく經驗的事象との必然的交渉を示さうとしないことにおいても、劍橋派とシュモラー一派とは、相通ずるものがある。方法上の難問については、必ずしも多く心を勞してゐないのである。おもふに、ドイツ後期歷史派の社會政策學と、イギリス劍橋派の厚生經濟學とは、その成立の過程において、また學說の形貌において、著しい相違があるにも拘らず、問題のねらひを同うするものがある。もちろん一方は、經濟史あるひは一般史に對して、ひろき接觸面を有するのに反して、他方は、數理派經濟學と密接な交渉をもつてゐるのであるから、性格的差異を高調せむとすれば、おそらく對蹠的なものと考へられぬことではない。しかしそれらのうちに潛む經國濟民的な理念への憧憬、社會的正義の確立への渴望に至つては、墺太利派にも、數理派にも、到底見出しがたき根づよさをもつてゐるのだ。「經濟社會の實相を知るにしたがつて、社會主義者たり得なくなつた」といふマーシャルの告白こそは、後期歷史派の人々にも、充分實感をもつて迎へられるところであつたらうと思ふ。ただかかる熱情をうちに藏してゐたから、その經濟學的認識は、ややもすれば、價値判斷（Seinsollen, Werturteil）を含むことになつて、客觀性を缺いてゐるとの認識論的非難を受けざるを得なくなつたのだ。厚生經濟學が、同じ學統をつぐ一部の人々から、認識論的な攻擊をうけてゐるのとひとしく、後期歷史派に屬しながら、多少とも科學の客觀性を重く考へる、社會學的傾向のつよい人たちから、非難されたのである。これらの點においても、兩學派の思想上の機構が、よく似通つてゐることを窺ひ得ると思ふ。

## 三

經濟學史上、方法論爭として著名なものに、さきにシュモラー對メンガーの場合があり、後には「價値判斷論爭」と通稱されるものがある（戸田武雄譯『社會科學と價値判斷の問題』昭和十三年刊行は、そのよき資料集でもある）。はげしい議論がとりかはされるのは、兩當事者が、案外互にひとしい立場にあるときに起り易いのだ。シュモラーとメンガーとが、共にドイツ理想主義のうへに立つてゐたことに、激烈さを約束するものがあつたといつてもよい。今、價値判斷をめぐる論爭の跡をかへりみても、同じ感慨をいだかざるを得ない。ひとしく後期歷史派に屬し、一方は、政策理想を認識の表面にもち出すほどの率直さをよろこび、必ずしも認識論上の嚴密に囚はれない遣り方にしたがふもので、他方は、もし認識が客觀性を伴はぬ限り、率直なる理想の表明にしたところで、つひに理由なき獨斷になつてしまふ他なく、單なる自慰にすぎないものになると考へて、出來るだけ客觀性の圈內にふみとどまらうとする。あへて理想への熱情を感ぜざるにあらず、指導原理の樹立をおもはざるにあらず、ただ、これを、何人も容認しなくてはならぬほどの必然さにおいて、言表することの不可能をおもふが故に、やむなく價値判斷を否定せむとするに他ならないのだ。いひかへれば、價値判斷論爭なるものは、後期歷史派の認識論的な反省過程をあらはすもので、「社會政策」を支持する文化價値を、いかにして、社會認識の平面にうつし出すことが出來るかの問題に答へむとするものであつた。おもふに、論爭を、論爭自體として眺めることの、いかに無意義なものであるかは、シュモラー對メンガーの場合に對するシュムペエターの批評の例を見ても、よくわかることであるが、論爭は、生れ來るべきものの觀點から評價されねばならぬ。對立する當事者の言ひ分から考へるのでは、徒らに煩瑣な論戰の渦中に、飛び込んで、自らをも見失ふことになるだけである。方法史的見地からいふと、論爭を超えて、そのうへに見出さるべき問題を考へることが必要である。

價値判斷論爭の立役者と目せられたマックス・ウェーバーの方法については、從來多くの見解がある。しかし吾々にとつて注目すべき重要な點が看過されてゐるやうに思ふ。彼の考へは、これまでの論理樣式と著しく異つたもので、おそらく第三のものをつくり出したといつてもよいのだ。すなはち歷史と自然科學との對立であるとか、目的論と因果觀との區別であるとか、先驗的論理形式と研究方法との差異であるとか、截然とわける考へ方でとらへやうとすれば、一向つかまらぬものを呈出してゐる。從來の樣式ではわり切れぬ特異なものを、彼はあたへて

ゐるのである。この點を重要視した解釋が、ほとんど見當らないのは不思議にさへ思はれる。個別化の論理を文化科學の方法に擬したリッケルトが、彼の概念構成をもつとも吾が意を得たものとして推賞したなどいふことは、いかにしても首肯しがたいところである。ウェーバーが、「一般的」とか、「類型」化とかいつてゐるのは、個別化ではむろんあり得ない。むしろ一種の普遍化ですらある。沒價値的客觀性を高調してゐるところなどは、どうしても價値關係的とは、表向きむすびつきかねるではないか。樣式のうへからいへば、いかにも自然科學的な概念構成の亞流にすぎないのが、ウェーバーの場合である。彼は、歷史でもなく、自然科學でもない、いはば第三の部類ともいふべき社會學をつくり出してゐる。リッケルトのいふ「中間領域」に本據を据えた趣がある。また論理形式の先驗的妥當に對して、深い疑問をいだき、內在的な研究方法上の「型」を、幾たびもつかつて見るといふことで、いはゆる「英雄的」な努力で、論理の眞空を凌がうとしてゐる。研究法が、先驗界にまでたかめられたといつてもよければ、超越的論理が、內在界にひきずり下ろされたといつてもよい。ともかく、截然と區別する仕方をやめてゐるのだ。また目的論の問題を、出來るだけ因果的に取扱つて見やうとし、價値とか當爲とかの世界を、人間の日常の經驗の心易さのうちに、目で見ることのできるやうに、手でふれることの出來るほどの身近な親しさに、引直ほすことをこころみてゐる。それを「理解」のはたらきといふ直覺主義的な、「方法なき方法」によつてあらはさうとしてゐるのだ。かやうに、ウェーバーにあつては、これまでの二元的な論理の對立や、世界の對立が、すべて具體的な經驗のうちに超克されることになつてゐる。これはおどろくべき大膽さと、生なましさとをもつて、學問の世界を建直さうとする努力のあらはれだといはねばならぬ。圖式的な考へや、杓子定規な仕方でなければはたらけさうもない思想家にとつては、ほとんど手のつけられぬ「方法」である。實際、方法なき方法ともいふべきものなのであるから、ウェーバーを、從來のととつた觀點からばかり論じてゐるのは、まことに諒解しがたいことだといはねばならない（たとへば Hans Oppenheimer, Die Logik d. soziolog. Begriffsbildung, 1925., A. v. Schelting の Archiv für Sozialwiss. Bd. 49 所載ウェーバーの方法に關する論文などを見よ）。つかまへにくいが故に、たえず問題視せられて來たといはれぬこともないが、彼は、あらゆる分野にわたつて「體系的」でなく、「斷片的」な示唆をあたへる役割を果したといふことも、彼において、主觀主義時代の學問意識が、もつとも鮮明にあらはれた結果であつたといひたい。つまり、體系的な、完成したかたちの科學とか、學問とかいふものが、考へられなくなつて來てゐるのだ。「理解」の方法

は、形ちのうへでこそ賴りないが、實感のこもつた主體性の生き生きとあらはれた把握の仕方である。かつてヤスペルスが、ウェーバーを評して Fragmentarismus だといつたのも、時代の感覺がつよくウェーバーの考へにあらはれてゐることを、物語つてゐる。彼が認識の客觀性を主張し、科學の沒價値性を高調したといふのも、逆に、認識の主體的な制約をふかく感じ、その普遍妥當性を危ぶむことにおいて、何人よりも切實であつたからだ。この時代のイロニーをおもふことなくしては、たとへば、かの價値判斷論爭に對する態度にしても、殆んど解しがたいものといはざるを得ない。實際、社會認識において、彼ほど自覺的に、また彼ほど鋭く、主觀主義時代の科學性の困難を剔出した人はなかつた。彼の周圍に、またそれにつづいて、幾多の歷史派學者が、社會學的方法の建立につとめたが、到底彼の「未完成」を超ゆることが出來てゐない。フラグメンタリズムの未知數をときあかすほどの優れた結果は、まだあらはれてゐない。「近代資本主義」の認識において、重要問題を提出したゾムバルトは、近年しきりに社會學的方法への試みを示してゐるが、そこに必ずしも新なる途があたへられたとは思ひ得ない。吾々自ら、ウェーバーと共に、「未完成」の學問意識のうちに沈潛して、時代の歸趣を、考へ直ほして見なくてはならぬ。

近年の方法論に、とどめをさすかのごとくにあらはれたゾムバルトの『三つの經濟學』（一九三〇年）は、あらゆる論點にふれて、經濟學を中心とした方法理論のエンサイクロペディアの觀がある。それは、また方法史を體系的にまとめたものともいひ得るのであるが、しかし著者の高名と博識に適はしいほどの效果をあげ得たものとは、いひがたいやうに思ふ。社會科學のみならず、近世科學一般の論理を考へて、經濟學の方法的歸結をあきらかにしやうとした用意は、大いに學ぶべく、味ふべきではあるが、あまりに體系化に忙しく、深味に乏しい憾がある。それは、マックス・ウェーバーの方法論集（Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 1922）の一卷にも盛り込まれた氣魄のつよさと示唆の豐かさとに比較をもとむべくもないが、メンガーの社會科學方法論にくらべても、その優越を認めるわけにはいかぬ。方法論に天才を要せずとはいへ、ゾムバルトは、この書において、彼の天才を充分發揮してゐないといはざるを得ない。それはともかく、『三つの經濟學』を讀むとき、吾々には、今日の經濟學が、いかに困難な地位に置かれてゐるかを知ることが出來る。彼は、學派の問題を重く考へずに、近世經濟學の主流を自然科學的方法にしたがふものと見て、それ以前ならびにそれに並んで、別に形而上學的な經濟學が唱へられて來た事實を顧みた。そこに法則本位の體系と規制中心の體系とが見出されるとい

ひ、そのいづれもが、社會文化の認識に適してゐないと斷定した。そして、この缺陷と誤謬とを救ふ途は、「理解」の方法による經濟學を措いて他はないといつてゐる。かくして三つの經濟學が考へられるけれども、それは、つひに一つの經濟學に統合されなくてはならぬものだと觀るのである。しかしゾムバルトが、かく統合を考へることになつたといふのも、彼自ら主觀主義時代の人だからである。いふところの自然科學的經濟學とは、客觀主義時代の人々がもつた學問意識のあらはれに他ならないのだ。いひかへれば、經濟學の論理が、しだいに內在化し、主體性をふかめることになつて、客觀的に組織づける (ordnend) だけでは滿足しなくなつて、理解する(verstehend) ことにならざるを得なくなつたのである。誤謬とか缺陷とかいふべき事柄ではなくて、發展、深化の諸相として解されねばならない。經濟學の歷史は、かく考へることによつてのみ、いよいよ自覺的に、精神の充實過程たる姿において、とらへられるであらうし、方法史は、すべてのものを、そのあるべき所に、あらしむるはたらき(Orientierung)だといつてよいであらう。そのためには、經濟學史を、つねに精神史的なひろい基礎との關聯において考へ、吾々自らの生長の歷史として、內面的に把握しなければならぬのである。

# 大戰以後の問題と諸問題

## 一

最近の廿年間に經驗した出來事は、必ずしも前例をもつて律することを許されぬものが多い。經濟學の問題にしても、いはば日に新なるものがあつて、クラシカルな敎養が、かへつて適切なる判斷を妨げる場合が少くない。現在行はれてゐる事態に似通つたものを探せば、過去の世紀のうちに、いづれかの國に、必ず見出し得るであらうし、また經濟理論のうへにこれを反映した痕跡を見つけることも、あるひは不可能ではあるまい。しかし、既成の學理あるひは公式を絕對視して、これに押込んで考へなくてはならぬ理由はないのだから、むしろ虛心に當面の變化を理解するにつとめた方がよいであらう。この場合、先づもつて吾々の心を動かす根本的な問題は、理論に對する懷疑的傾向である。學理にむかつて信賴がもてなくなつたといふことが、大戰以後に著しい思想的動きであつて、經濟學意識の展開をかへりみやうとする當面の課題にとつて、それは、もつとも大きな謎を提起してゐるものだ。理論に對する著しい不信任こ

そ、方法史的に見て、最近廿年間をつらぬゐてゐる「問題」だといひたい。そこから、大小の問題が、派生して來てゐると見ることができる。世界大戰を經驗してから後の經濟學における諸問題は、過去一世紀半にわたつて、ともかく保つてゐた理論への信頼がなくなつたことを、さまざまな形ちであらはしたものに他ならないのだ。たとへば、一九一九年の頃からはじまつた景氣變動の研究といふやうなものも、歸納的、實證的に統計の方法によつて、何ものかを摑みたいといふ要求にもとづくもので、理論上の羅針盤を失つた經濟學の面影を語るものといはねばならぬ。また世界經濟の理論が、ほとんど姿を消してしまつて、これに代はるに國家と經濟との交渉が、喧かましく論ぜられるに至つたといふことも、同じ思想動機にもとづくものといはねばならぬであらう。さらにまた統制經濟の横行、國家干渉主義の普及、國民的アウタルキーの要請などいふ、實際上の必要にみちびかれた諸問題にしても、みな理論にかかはりなき境地を示すものといつてよいであらう。ここに、大戰以來の經濟學の方法にとつての「問題と諸問題」(Problem und Probleme) が横はるのだ。

かねて信頼してゐた理説では、實際の事態を處理してゆくうへに不便が多いといふことで、理論を信任しなくなるといふやうな實例は、たとへば、自由貿易理論が、どうしてもドイツにはうまくあてはまらないことが、ハッキリした前世紀の六七十年代にあつたが、現下の「理論に對する不信任」といふのは、かかる個々特定の理論形態に對して起きたのではなしに、實に理論そのものに對する深い懐疑なのである。理論といふものに信用が置けないといふ感じが、つよくはたらいた結果なのである。いひかへれば、理論に獨立の價値をみとめやうとしなくなつたといふことにもなるであらう。この傾向は、ひとり經濟學に限られたものではなく、ひろく反省文化の全般にわたつて見出されるところであつて、その兆しは、すでに大戰以前に溯つて探られなくてはならない。否なむしろヨーロッパ國民の思想文化が、はじめから荷つてゐた運命だといはれぬこともない。すなはちもともと主觀性とか、主體性とかを强調する世界觀は、客觀的な實在界を表徵すべき理論にむかつて、全幅の信頼と支持とをあたへるわけにはゆかぬものと見なくてはならぬ。基督教的世界秩序を、世俗化して、あるひは人間理性に飜案して、「自然法」の秩序にみちびいたことが、すでに理論の客觀性を、生活化するに至つた第一歩であつたが、さらに、それを「進化の法則」といふやうな、生命の自己發展を中心として、世界秩序を考へることになると、客觀的實在のもつ神祕性は、ほとんど掻き消されてしまふことになり、理論（テオリア）のうへにも、根本的な變革が起らざるを得ないのだ。人間の外にある

宇宙を觀照するための理論が、人間を出發點とも、また到達點ともして、宇宙を觀察するものに變つて來たのである。吾々の自己とか、意識とか、心理とかに引き直ほしてでなければ、一切のものを理解できない氣分がつよくなつてから、理論が、主觀からも實在からも浮き上つた、魔力的な作用として迫ることがなくなつてしまつた。理論は、高々「生」の一方面を擔任する內在的機能にすぎないものとなつてしまつたのである。そこにはもはや、「永遠の相」の下での觀照におけるごとき、莊嚴な力づよさをおもはせる神祕の被覆は、全くとりすてられて、ただ見る赤裸の生命の動きのみとなつてゐるのだ。ヨーロッパ國民の思想文化は、かくの如き步みをつづけて來た。だから、世界大戰を境として、俄かに理論を信じなくなつたなどいふわけではなく、すでに、久しくかくなるべき必然の途を辿りつつあつたのだ。ただかの未曾有の擾亂を、ヨーロッパの天地に展開して見ない間は、自らの步み來たれる有りのままの姿を、充分に見究めることが、むづかしかつたのである。まだ魔力的な理論の界を、ソツとして置きたい未練が、たえず彼らの間にはたらいてゐたといつてもよい。率直に懷疑をいひ出すことを多少とも差控える低徊趣味がのこつてゐたと見てもよいであらう。しかし彼らを驅りたてる生活意欲は、もはやかくのごとき倫安をゆるさなくなつて、つひに一大淸算を餘儀なくさせたが、しかもこの世界を震撼した動亂の餘波は、廿年後の今日に至つて、なほ何らかの均勢に達したとも見えない。安定への焦慮がつのれば募るほど、新なる動搖がたえずつづいてあらはれて來る有樣である。今後についての豫測も、したがつて至難だといはねばならぬ。

しかしながら、かやうに、靜觀による世界秩序をもつことに、ほとんど自信を失つたかに見えるヨーロッパ國民の間に、全く觀點をかへて、自らをも人間の永き歷史の一齣として、運命的關聯のうちに置いて眺める傾向が、しだいにあらはれて來たといふことは、まことに理由があり、また興味ある事象だといはざるを得ない。今更、古代的な輪廻の思想にたちかへるものとも見えないが、文化の動きを全體として、觀相學的（physiognomisch）に理解しやうとする努力や形態學的（morphologisch）にとらへやうとする企てが、頓みに人々の注意をひくに至つた。このことは、主觀主義時代の動向を、もう一度裏返へしにして見てゐるといふ感じがせぬでもないが、そこに歐羅巴文化のうへに、超主觀主義時代とも名づけたいやうな、新しい段階がはじまつてゐるのかとも考へさせる兆候が、少からずある。內面化の方向にひたすらにはたらいてゐた彼らの思想が、一轉して、逆に、外にむかつて動き出したかのごとき趣を見せてゐるので、この超主觀主義的な動向も、今日までのところ主觀主義文化の步みを再吟味してゐる

程度以上に、多くを出ないが、おそらくそこに新なる時代への胎動を感ずべきであらう。彼らは、理論に對する不信任はやむを得ないとして、何らかそれに代はるべきものを、一生懸命に模索しはじめてゐるのだ。闇黑のうちにあつても、内なる希望の光をすてずにゐるところに、ヨーロッパ國民の根づよさがある。もとより新なる文化階梯にすすみ得るか否かは、豫知しがたい問題ではあるが、混沌のうちに、秩序をもとめんとして必死の努力をつづけつつある有樣は、異つた文化の世界の建設に運命づけられてゐる吾々にとつて、重要な示唆をあたへるものといはざるを得ない。

## 二

經濟理論は、虛構なものではないにもせよ、あまりに一般的で、國々の現實の事情に對しては、とかく間に合はぬといふ感じがつよくはたらき出した。從來の經濟學者の敎ゆる理論は、世界のいたるところに適用せられるに相違ないが、具體的な過程にむすびつけ難い。各國の情勢が、さほど差迫らなかつた時代には、そしてどこの國でも進步發展があるものと信ぜられてゐた間は、やがて「純理」的に動くやうな場合が、遲かれ早かれ來るであらうから、それまでは多少チグハグなところがあつても、さまで氣にかけるには當らぬものときめて、濟ましてゐられたのであつた。ところが、國の内外が緊張して來て、自國の經濟の特殊性がふかく感ぜられて、これを中心に善處しなくてはならぬといふ要求が先立つことになれば、一般普遍の理論は、閑却されて、局部理論なり、差當りの見透しなりが、人々の關心をあつめるやうになることは、いふまでもない。たとへば貨幣數量說は、不動の眞理をものがたつてゐると思はれても、比例關係の成立する現實の場所あるひは範圍を、つかまへかねた場合には、空理も同然である。價格は需要供給によつて決定されるといふ命題が、意味あるものとなるためには、その價格決定の現實に行はれる「場」の考へが入つて來なくてはならない。從來は、この具體的な妥當の「場」を、さほど問題視しなかつた。それでも、經濟學者たちは、ともかくも理論を證明すべく努力したのだが、理論が、ただ事情をあきらかにする手段にすぎないものと考へられるやうになつてから、むしろ事情を說明し、實行上の指導のために理論を要求するといふやうに、その態度がかはるに至つた。

その著しい例は、一九一九年以來、流行の如くになつた「景氣變動」の研究であらう。アメリカを主として、各國とも大規模な調査研究の機關を設けて、經濟指數(The Index of general

business conditions)、各種の曲線調査(Speculation-Banking-Money-curve)、財界バロメエター(Business-barometer)などを手がけることになつた。すなはち市場情勢の全般についての經驗的觀察を、統計的に處理して、一定の見透しをつくり、豫報を試みるところまで行かうといふのである。そこには、別に理論があるわけではなかつた。不景氣襲來の兆候を打診する必要から、はじめたものであつた。恐慌の周期性といふ考へは、夙にジェヴォンスのいひ出したものとして周知せらるるところであるが、この不景氣と好景氣との境界をなす恐慌の本質については、從來の經濟學理は、必ずしも動態的な概念のもとに迎へやうとしてゐなかつた。市場情勢の波動狀態といふやうな觀察は、全く考へのうへにあらはれなかつたから、周期的現象として恐慌をとらへやうとしても、その方法をもたなかつたのである。生產消費の適合がうまくゆかなかつた場合に起きる事態として、概念的には「恐慌」を考へても、それが、いかなる構造をもつて經濟社會に內在するかが、一向あきらかにされてゐなかつた。支拂義務の一般的な履行不能の狀態が、時折に、突然的にあらはれるものと考へ、病的現象として觀られ易かつた。だから、經濟學の體系のうちに、恐慌論はほとんど重要な地位を占めることを許されてゐなかつた。經濟社會の生理から、「恐慌」を演繹することは、つひにかへりみられなかつたのである。

この理論上の不用意は、大戰後の經濟不安を凌ぐための見透しをもとめる立場から、痛切に感ぜられて、むしろ病理あるひは生理にかかはりなしに、ただ經驗的に判斷する統計醫學の類ひと同じ型の方法を用ひたのが、「景氣變動」の研究であつた。ところが、實證的研究が集積されて、そこに從來の靜態理論にあつては、思ひ及ばなかつた各種の關聯が、しだいに明かにされて來た。それで、恐慌といふ非合理的な事象が、時をへだてて點在してゐると考へられたのが、やがて、變動の曲線のうちに、一定の地位をたもつものとして、合理化されることになつた。個人的な立場から、好景氣とか不景氣とかいふやうに評價的に見ないで、景氣の循環過程として、市場情勢を必然的に認識しやうとすることになつて來た。かつて古典派經濟學において考へられた、經濟社會の靜的な調和均衡にかへるに、運動量間の均衡を問題とするやうになつた。これは、新古典派における生物學的動態觀にむすびつけて考へられぬこともないが、それよりももつと外面的な、物理的な現象としての認識であつたことを注目しなくてはならぬ。波動的に、いはば動あれば反動あるといふやうに、上下にひとしい運動量があらはれるといふ考へが、つよくはたらいてゐるのであるが、どれだけの時間において、それら運動量間のプラスとマイナスとが均衡するといふのかを規定する方法をもつてゐないところに、深い惱みがあ

る。運動量の間の均衡を算出することは、過去については、困難はないであらう。しかもそれは任意のものであつて、均衡すべくして均衡したといふ内的必然は、證明され得ない。況んや將來において、何時いかなる形ちで、均衡點に達すべきかを豫測することは、出來ない。そこに實際政策の必要のための景氣變動の研究は、自らの役立ちの限界を見出さざるを得なくなつて、財界豫測をあまり日常の用に供しやうとする企ては、容易に所期の目的を達し得ないことになつたが、これは、理論をもたずに始めた仕事の當然の歸結であつた。

けれども、この試みは、前にのべた「觀相學的」な歴史哲學の方法と、きはめて似たものがある。現代の資本主義經濟文化の形相を、あきらかに描き出して來るところに、實際上の景氣豫測に役立つと否とに拘らず、きはめて重要な寄與をなしつつあるといはねばならぬ。當るとか當らぬとかいふことで、その研究の意義をきめてはならぬことは、恰も天氣豫報だけで、氣象學的研究の意義を判定してはならぬのと同じである。現に、景氣變動の研究に刺戟せられて、爾來その内面的な理論に對する興味が、ドイツを主としてまた學界を賑はす題目となつた。資本主義機構の問題を、實證的に、イデオロギー的な空疎な仕方をはなれて、究はめるやうになつて來てゐるが、そこに、新なる經濟學理論への通路がひらかれてゐることは、想像にかたくはない。事情の説明のために、また實用上の方便を見出すために、理論を取扱ふといふ以上に、資本主義文化の形態學的な考察に資せむとする機運が、世界大戰後の理論の廢墟のあとから、わきあがつて來てゐる感じがする。經濟學者は、もはや經濟現象の理論を斷念せざるを得なくなつた代りに、ひろく、ふかく經濟文化の理論にむかつて、新なる出發をなすべく約束されてゐるのである。

## 三

國家と經濟との交渉が、全く新な姿勢をとることになつたことが、戰後經營にあたつて、經濟理論の無力をおもはしめた最大な原因だといつてよい。少くも十九世紀を通じて、國家から獨立した、世界經濟の全貌を仰ぎ見ることが、容易であつたといふ事情から、經濟理論は、ほとんど國家への關心を示さなかつたのである。純粋に、經濟的なる現象についての理論を、つくり上げることの出來る世相であつた。經濟法則の妥當する世界が、眼前に展開されてゐるといふ確信があつた。それが、いかなる政治的勢力均衡のうへに支持されてゐたか、各個の文化國民の個性とか、國民國家の特性とかが、いかなる條件のもとに、かくのごとき普遍性ある世

界を浮び上らせてゐるのかといふやうな、社會文化の哲學問題は、經濟學者にとつても、またそれ以外の識者にとつても、さほど重要な問題とはならなかつた。既成の經濟社會の進歩過程をながめるだけで、滿足してゐたのである。それが、世界大戰によつて、一擧に崩れてしまつた。といふよりは、前提となつてゐたものが、全部さらけ出されたのである。全く新しい組合せをやつて見るより他はなくなつた。世界經濟も崩れたが、國家といふ價値についても、見直さなければならぬことになつた。ヨーロッパ國民のもつてゐた幾つかの國家的機構が、重大な危機に直面した。人々は、眼前に、儼乎として聳えてゐた國家の崩れ去るのを見た。いはば國亡びて山河ありの感を、ふかく腦裡に刻まれた。山河ではない社會が、國家の變革を通じて、いかに政治的機構とふかく結び合つてゐるものかを、切實に感ぜざるを得なかつたのである。國家と經濟社會との交渉は、かくして、あたらしい問題としてあらはれることになつた（拙著『經濟哲學通論』中の「全體主義經濟觀」および「經濟の優位」の項參照）。

國家生活における危機を經驗した歐洲諸國間に、大戰以後、國民的自足の思想（Nationale Selbstgenügsamkeit）を建前とする實際的情勢が出來上つた（J. M. Keynes, Schmollers Jahrbuch 57/4, 1933.）。これは、戰後の賠償問題を中心とした歐米の政治經濟における機構變革（Strukturwandel）がもたらした結果であつて、「自由放任の終末」にともなつてあらはれた、統制調節の要請にもとづくものといはねばならぬ。經濟それ自らのうちに、いはば自己統制の必要が生じて、市場における企業家、勞働者、消費者等の契約當事者に、それぞれの自主的な群が生れ、しだいに大なる組織のうちに吸收せられて、單なる個人的な力の發動は、どこにも見出されないことになり、個人主義的自由競爭などといふものは、概念上の抽象にすぎないものと化した。かやうな集團化の傾向は、一見、經濟以外の勢力が、經濟社會を規定するものであるやうに思はせ易いが、むしろそれは、經濟の自己統制であり、經濟社會の內部に生れた政治化運動であつたといつてよい。イギリスにおける "Reconstruction" アメリカにおける "Campaign against waste in industry", "National efficiency" またドイツにあつては「社會化」のごときは、國家權力の發動を伴ふものであるにもせよ、それをもつて、直ちに經濟の自主性が沒却されるに至つたものと考へてはならぬであらう。國家といはず、經濟社會といはず、みな統制原理のもとに置かれて、そこに政治の經濟化（Verwirtschaftlichung der Politik）あるひは經濟の政治化（Politisierung der Wirtschaft）といふやうに、文化生活における諸分野が、互に機能的に、交錯し合ふことになつて來てゐるといはねばならぬ。國家が、他の文化圈から

はなれて、しかもそれに權力的觸手をのばすといふのではなく、國家も、文化國民の生活全體を規制する一つの重要なるモメントとしてはたらく、といふやうになつて來て居るのだ。このやうな見地から、吾々は、いはゆる國家干渉主義（Staatsinterventionismus）の問題なり意義なりを、考へて見なくてはならぬ。ここにいふ國家干渉主義といふのは、たとへばロェプケの說明によれば「國民經濟の生產、分配に變更をもとめむとする一切の經濟政策的處置であつて、しかも、生產手段の私有制と、それにもとづく市場經濟組織とを、社會主義のごとくに廢棄せむとするものではない」（Handw. d. Staatsw. 4. A. Ergänzungsband, S. 864.）のである。生產手段の所有者および企業者をして、彼らの充用せむとする方面以外に、その生產手段を利用せしむるために、社會權力にもとづいて發する强制命令が、この國家干渉主義の形態だといふことができるが、生產形態をめぐる政治的體制の急激な變革をもとめる場合とは、著しく異つたものがある。勢ひのすすむところ、つひに經濟社會の自律性は失はれざるを得ぬにしても、その失はれゆく形ちは、文化國民の全體生活に合流せしめられることを建前とするもので、十六七世紀の國家萬能時代における保護干渉と同日に論ずべきものではない。國家と經濟社會との相剋は、しだいに深刻となつては來てゐるが、國民國家と、國民的經濟社會との結びつき如何は、その國民の置かれた世界政局における地位によつて決せらるべきものであるから、結局は、その相剋は、國民の生活に、具體的に妥當すべき社會倫理的問題として、解決されなくてはならぬであらう（拙著『經濟倫理の構造』一〇頁以下、二二八頁參照）。

國家干渉主義は、自由主義經濟の豐かに發展した國民經濟にとつては、必要がない。大戰後における國民的自足經濟への要請は、干渉主義とは、おのづから別個の問題として考へられてよい。經濟的なるものの領野が、世界經濟としてではなく、國民化されて來たのではあるが、その故に國家活動に吸收されてしまつたわけではないことを、看逎してはならない。むしろ逆に經濟が國家に干渉し、いはば經濟國家ともいふべきものをつくり上げる方向さへ、あらはれてゐる。かかる經濟社會の自主性を支持してゐる基礎は、いふまでもなく資本主義經濟であつて、前節にのべた景氣變動があらはれる「場」をなすものに他ならない。いひかへれば、各國民の經濟社會の內部機構について、「產業平和」の問題、また景氣變動の「安定」の問題が、たえず重要な理論上、また政策上の關心をあたひするものとなつて來てゐるのである。資本主義經濟に關する是非の論議にしても、つねに國民生活のもつてゐる各般の社會的、歷史的限定を、十二分に考慮しなくてはならぬといふことが、自覺的となつて來た。十九世紀における世

界經濟的公式をもつてする解釋のごときは、いかなる妥當の「場」もあり得ないことが、明かに諒解されるに至つたのである。かくして、ヨーロッパの國民主義は、かつてあつたやうな理想主義的性格のものではなく、きはめて現實的な、社會形態としてはたらくものに、變つて來てゐるのである。

國民的協同體が、もつとも具體的な社會現實となつて、かの十九世紀前半における歷史主義論者の考へた理念的なものが、今日では、吾々の直接なる經驗と化したのである。この國民的協同體は、一つの全體として、生命ある實在として、手にふれ目に見ることのできる確實さをもつて、吾々に受とられることになつた。人は、これを、民族とよび、血の意識によつてとらへやうとつとめる。國民主義あるひは民族主義は、かくして、ほとんど一切の客觀性理論を信じなくなつた人々の間に、恰も確然たる指導原理であるもののごとく、遵奉せられつつある。それは、極端な理想主義のやうでもあり、またはげしい功利主義のやうでもある。あらゆる學理は、すべてドグマと化し、論理にかへるに、神話をもつてして憚からぬ。靜思の生活（vita contemplativa）よりは、活動の生活（vita activa）が重んぜられることになる。かくのごとき建前のもとに、たとへば民族主義の經濟學が可能であるもののやうに主張することが稀れではない。しかしそのいふ經濟學は、おそらく上に述べて來た近代ヨーロッパ國民の學問意識とは、同日に語ることのできぬものだといはなくてはなるまい。

## 四

實踐を主とした學問は可能なのであらうか、「生」そのものを、如實に示すごとき學問が果して成立つであらうか、かかる問ひは、從來ともさまざまな形ちで發せられて來た。「生と學との距離」といふ問題は、近世ヨーロッパの反省文化にとつて、解きがたき謎ともなつてゐる。出來るだけ實踐の內面性に沈潛して、ほとんど概念的把握の可能を超えたとおもはるる境に、いはば直觀的方法にまがふまでに理論の歩をすすめた場合としては、形式社會學の創唱者として特異の地位を占めるゲオルグ・ジムメルほどの人は、見當らぬといひ得るであらうが、この方向にしたがつて、實踐の理論ともいふべきものを、經濟學の上におもひ合はせた場合には、すでにのべたカール・メンガー、マックス・ウェーバーのごとき人々がある。最近注目されること多き Gottl-Ottlilienfeld の考へも、この方向を逐ふものと見てよいであらう。そこでは、「生」の形態として、事象を理解しやうとする方法がとられてゐるので、生成するはたらき

と出來上つたものとを、內面的關聯において統一せむとするのだ。構成する作用をそのままに構成態として觀ることをこころみるのである。これは、ジムメルの生哲學的な流動性や直觀性を枯渴せしめて、經驗科學化したウィーゼの形式社會學が、關係論と形態論とに分裂を餘儀なくされて、つひに、いかなる生動の趣きをもそなへぬ社會學に陷つたことを思ひ合はせるならば、生けるままの姿をとらへることの方法的困難は、想像以上だといはねばならぬ。ジムメルのごとき天才にして、はじめて靜と動、明と暗、生と死の對立を、內面的に超越した境地を髣髴せしめ得るでもあらうが、到底凡手のよく企て及ぶべきところではない。あるひは科學的認識の圈內にもち込むことを許さぬ境地であるといふべきであらう。今ゴットルの狙ふところを見るに、まさにこの至難の手法を、經濟事象の解明に試みんとしてゐるのだ。マックス・ウェーバーが、科學性を重んずるところから、ジムメルに倣ひながらも、「斷片的」な認識をもつて甘んぜざるを得ぬとした同じ問題を、ゴットルは、多分に形而上學的昏迷のあるのを意とせず、きはめて大膽に、生そのものの表現として、經濟を語らむとしてゐる。ジムメルを見、ウェーバーを顧みるとき、そしてウィーゼの努力のあとを檢するとき、吾々は、ゴットルの方法の客觀性について、多大の疑問をいだかざるを得ないものがある。しかしながら、それも亦、科學への懷疑のかくも旺んな現代にあつて、理由のある、また興味のある示唆たるを失はぬと思ふ（ゴットルの所說については、昭和六年刊行宮田喜代藏著『經營原理』、昭和十一年刊行福井孝治著『生としての經濟』等を參照せられたい）。

經濟學者の任務は、國民經濟の實行上の目論見に對して、進言者たることにあるといふ思想は、ヴィルブラントのごとき代表者を得て、近年問題をあらたにしてゐるが、おそらくこの考へは、ウィリアム・ペテーあるひはフランソワ・ケネーの場合に、つよくあらはれてゐた志向であつたであらう。ペテーにせよ、ケネーにせよ、技術家的天分に富んだ人であつただけに、國家社會の經濟過程に對して、合目的處置をとらむとする欲求を感じ易かつたのであらう。もちろんヴィルブラントの考へにあつては、たとへばケネーにおけるごとくに、目的界が明白に表象され難い事情にあるだけに、より多く意思的であるといつてよいであらうが、實際政治の指導原理をあたへることに、熱意をもつてゐたケネーの思想は、「自然的秩序」の客觀的妥當を信ずるにもせよ、その執意的なることにおいて、ヴィルブラントに勝るとも劣るところはない。吾々は、かくまでに、實踐を重んずる傾向が、つよくはたらいてゐる今日の情況より推して、また國民主義あるひは民族主義の動向をあはせ考ふれば、今後の經濟學研究は、むしろケネー

的構想に近づくことなきを保しがたいと思ふ。もとより自然的秩序を信ずる客觀主義にたちもどるといふ意味ではなくして、意思的に、完全社會の建設をめざして、アウタルキーの充實をはからむとする志向においてである。序說にのべたやうに、今日の實際は、メルカンチリズム時代の再生をおもはせるものがある。經濟學の再建のためには、おそらくアダム・スミスのごとき大才をまたなくてはならぬであらうが、その再建の日にいたるまで、多くの經濟學的研究は、あるひは民族主義の旗印のもとに、あるひは國策順應の建前によつて、實際的な目論見をつくり、その實現の方策を工夫することに、沒頭するのではないかと考へられる。そこでは、經濟學の對象たるべき世界は、明かにせられないであらう。著しく政治的な意味を含んだ生活事實をめぐつて、局部的な目的論が賑かに語られることになるであらう。そして、さきに關說した景氣理論から發展した資本主義體制の檢討をも、時務的な要求から、バラバラなものに蹴散らしてしまふかもしれない。經濟學にしたがふ學者たちは、かやうな限られた「檻の內」を歩きまはるだけになるかもしれない。そこでは、學問は、全く生活過程のうちに織り込まれて、生活は、民族的な對立相剋に支配せられて、世界の文化といふやうなものは、まるで見失はれる時が來るであらう。あるひはすでにその時が來てゐるのであるかも知れぬ。

しかし、さきにいつたやうに、經濟學者の間に、經濟現象の理論を斷念して、經濟文化の理論をつくり上げやうとする努力が、すでにあるのだ。その經濟文化を、國民的利己主義の立場からズタズタに斷ち切ることをせずに、その動きなり、質とか量とかを、全體として靜觀する行き方をとる學者がゐる限り、新しい經濟學に對する希望を、捨てるには及ぶまい。吾々は、その經濟文化の理論が、いはば超主觀主義時代に入つて、いかなる形ちで出來上る見込があるかは、豫測しがたいが、主流をなすものは、經濟經營といふ立體的な有機的な存在が、無限連續をなして發展してゆく客觀的形相をとらへる方法ではないかとおもふ。たとへば「經濟形態學」といふやうな方法に、多少ともその片鱗を見出すことができるであらう。かかる方法が、さらに深化せられて、主觀主義的現實感の奧底に徹するところまで行つたならば、それは、超主觀主義時代の方法たり得るであらう。この方向は、おそらくは、ウェーバー、ゾムバルトのごとき、「理解」の方法のもつ直覺主義的把握の曖昧なるものとは異つて、はるかによく、社會文化の客觀的認識に貢獻するであらう。ただ形態學(Morphologie)といふ方法にしたがふことは、やはり事象の本質を看拔く力がなくては出來ない。直觀の豐さがなくては、何の成果もあげ得ない。色を見、形をながめてゐるだけで、本質を見やぶることが出來ない人々には、不

可能の方法である。ゴェテも形態學は、有機的存在の形態、形成、變化についての特異な意圖と方法の問題であつて、對象の問題ではないといつてゐる (Goethes Werke, Cotta-Ausgabe Bd. 30. S. 11. Bd. 39. S. 133.)。それはともかく、經濟學に關して形態學的な試みをしたものとしては、H. Schack, Wirtschaftsformen, 1927 (酒井正三郎邦譯『經濟形態學』昭和五年刊) のごときものがある。もとよりそれ自らとしては、いはば海のものとも、山のものともつかぬ企てにすぎないが、經濟學の將來を察する一つの兆候として、考へられぬことはないと思ふ。

(完)

昭和十三年十月五日　印刷
昭和十三年十月十日　發行

經濟學方法史
定價　一圓五十錢

著者　杉村廣藏

發行者　東京市麹町區內幸町二ノ一二・內幸ビル
理想社出版部
佐々木隆彥

印刷者　東京市牛込區改代町二四番地
田中末吉

發行所　東京市麹町區內幸町二ノ一二・內幸ビル
合資會社　理想社出版部
電話銀座(57)三四三七番 三四三八番
振替東京七八三〇三番

(理想社印刷所印刷)

## 近刊豫告

本多謙三著

**哲學と經濟**（十一月上旬發行）

石橋湛山著

**經濟と人生**（十二月上旬發行）


理想社出版部刊行書

杉村廣藏著

# 經濟哲學通論

四六判　二三八頁
定價　一圓五十錢
送料　十四錢

シュパンは經濟哲學を豫想しながらも、これを社會哲學より區別すべき方途を見出し得ずして了り、またこの哲學的領野を拓いた先驅者左右田博士は經濟的文化價値の形式によつてその限界を劃し得べきことを力說せるも、その形式の妥當が果していかなる內面的構造を要求するものなるかを明かにすることなくして終つた。著者は先人未拓の地ともいふべき經濟的價値世界について、その內部構造とその發展の形相とを描き出す劃期的勞作を成就げた。少くも經濟哲學はこの書によつて始めてその全貌が示されたものといつても過言でない。

目次　一、經濟哲學の概念—哲學の方法—社會的文化と世界觀—經濟哲學の構造—經濟價値の問題。二、經濟學の哲學的前提—哲學と科學＝方法論の問題—分類論について。經濟學の方法＝「經濟法則」の論理—原子論的認識方法—社會有機體の思想—經濟學の諸方向。經濟學史の構成＝學史の論理的性質—世界觀による學派の分岐—全體主義經濟觀。經濟史と經濟學＝兩者の交涉—唯物史觀の方法。三、經濟文化の價値理論—經濟性原理＝經濟の意味—限界利用原則—「經濟計算」の問題—經濟的合理主義の生成。經濟價値の秩序＝動機の分化—貨幣價値の秩序—合目的性の諸系列。價値形態の變化＝資本蓄積—世界經濟の消長—經濟の「優位」。社會秩序と世界觀＝自由主義と全體主義—協同體文化の方式。經濟倫理の發達＝厚生經濟の理念—經濟的正義の問題—經濟倫理の妥當形態。結び（左右田哲學への回想）—左右田と經濟哲學（武藤光朗）—左右田喜一郎の世界觀

文學博士 桑木嚴翼
文學博士 金子馬治 監修

# 新哲學講座（全三卷）

全卷完成
特價提供

▽菊判總クロース美裝
▽選擇自由・各卷分賣

第一卷
第二卷 各特價二圓七十錢（定價三圓）
第三卷 特價 二圓五十錢（定價二圓八十錢）
送料・二二（第三卷・一四）

今日の如き重大時局に當りては、我々は哲學的思索に依て世界と人生とに關する明確なる信念の把握を急務とする。この時、哲學の大衆化を使命とする本講座は、わが哲學界の代表的學者を總動員して、簡明平易な敍述を以て複雜多岐に亘る現代哲學を包括的體系として開示し、又時代の要請に添うて日本及び東洋哲學を多く加味し、以て新時代思想の建設に資せんとするのである。

**第一卷 基礎哲學**＝哲學とは何か（高橋里美） 認識論（鬼頭英一） 在在論（務臺理作） 論理學通說（本多謙三） 哲學的方法論（細谷恒夫） 形而上學（岩崎勉） 哲學的人間學（高山岩男） 價値の哲學（由良哲次） 世界觀學（大江精志郎） 印度哲學概論（金倉圓照） 支那哲學概論（山口察常） 日本哲學概論（三枝博音）

**第二卷 特種哲學**＝生哲學の輪廓（勝部謙造） 倫理學（新開長英） 宗教哲學（大島豐） 美學（大西昇） 現代心理學の動向（佐久間鼎） 現象學（大關將一） 解釋學（構倭雄） 哲學的經驗論（植田清次） 行動主義の哲學（武田良三） 現代科學概論（細川藤右衛門） 佛教哲學（山口諦助） 孔孟哲學（出石誠彦） 老莊哲學（福井康順） 日本佛教（圭室諦成） 神道思想（清原貞雄）

**第三卷 文化哲學**＝文化哲學序說（桑木嚴翼） 歷史哲學（竹下直之） 教育哲學（稻富榮次郎） 經濟哲學（移村廣藏） 法律哲學（木村龜二） 國家哲學（松田治一郎） 社會哲學（堀眞琴） 文化社會學（佐藤慶二） 東洋藝術學概說（一氏義良） 現代哲學の動向（宮本和吉） 近代日本の哲學思潮・明治時代（小山甫文） 大正・昭和時代（今田竹千代） 內容索引



小泉丹・吉江喬松
高橋里美・和辻哲郎 監修

# 人間學講座 全五卷

豫約募集

（內容見本進呈）

菊判各卷平均二九〇頁
會費每月拂金二圓
送料各卷十四錢

（各卷項目及び執筆者）

**◆第一卷 人間の哲學的考察** 人間學とは何か（九鬼周造） 人間學的哲學序論（金子武藏） 人間觀の諸類型（高坂正顯） 人間の心理學的素描（千輪浩） 人格學の人間觀（由良哲次） 社會學に於ける人間觀（小松堅太郎） 教育學の人間觀（長田新） 辯證法的神學の人間觀（宇井伯壽） 日本思想の人間觀（高階順治） 印度思想に於ける人間觀（武內義雄） 支那哲學の人間觀（小泉丹） 人類學上より觀た人間（西村眞次） 生物學の人間觀（移川子之藏） 生理學より觀たる人間（浦本政三郎） 遺傳學から觀た人間（川上理一） 雌雄の科學と人間（內田亨） 人類の起源と將來（平光吾一） 人類の精神分析學（大槻憲二） 國力の基本としての人間（暉峻義等）

**◆第二卷 人間の科學的考察**

**◆第三卷 人間の文藝的考察** 民族學の人間觀（川上理一） 西洋文藝に現はれた人間（獨塊文藝（成瀨淸） 佛伊文藝（吉江喬松） ロシヤ及ポーランド文藝（原晃一郎） 東洋文藝に現はれた人間觀＝印度文藝（平等通昭） 支那文藝（竹田復） 日本文藝＝古代及中世（久松潛一） 德川時代（穎原退藏） 明治以後（柳田泉）

**◆第四卷 人間の宗教的及び歷史的考察** A宗教＝宗教と人間（佐野勝也） 佛教の人間觀（羽溪了諦） 基督教の人間觀（石原謙） 民間宗教の人間觀（古野淸人） B歷史＝ギリシヤの人間觀（出隆） 中世の人間觀（今泉三良） 文藝復興期の人間觀（大類伸） 市民社會の人間觀（新明正道） 世紀末の人間觀（本間久雄） 現代の人間觀（鬼頭英一）

**◆第五卷 人間の諸問題** 人生の目的（高橋里美） 人間の自由（岩崎勉） 運命（大江精志郎） 天才と狂人（杉田直樹） 心靈（小熊虎之助） 終末觀（桑田秀延） 相貌學（正木正） 死（兒玉達童） 言語と人間（小林英夫） 肉體と精神（木村素衞） 神話を通して觀たる人間（松村武雄） 風土と人間（大間知篤三） 歷史と人間（原隨園） 戰爭と人間（レーヴィット・齋藤信治譯）

## 理想社出版部刊行書

| | |
|---|---|
| 木嚴翼著 倫理學の根本問題 | 二・二〇 一四〇 |
| 金子馬治著 現代哲學十二講 | 三・五〇 二二〇 |
| 金子馬治著 文藝及哲學論集 | 二・八〇 二二〇 |
| 杉村廣藏著 經濟哲學通論 | 一・五〇 一四〇 |
| 杉村廣藏著 經濟學方法史 | 一・五〇 一四〇 |
| 鈴木重雄著 日本精神生成史論 上・中・各三・五〇 下三・八〇 各・二二〇 | |
| 湯淺誠之助譯 リツケルト哲學の根本問題 | 二・二〇 一四〇 |
| 岩崎勉 大江精志郎譯 クローナーヘーゲルの哲學 | 二・八〇 二二〇 |
| 岩崎勉譯 ブレンタノアリストテレスの存在論 | 二・七〇 二二〇 |
| 櫛田佐藤 俊雄 慶二譯 シエラー哲學的人間學 | 一・三〇 一四〇 |
| 湯淺誠之助譯 ハイデガー形而上學とは何であるか | ・六〇 〇六〇 |
| 出上 蓁照 隆淳譯 マクスヴント希臘人の世界觀 | 一・五〇 一四〇 |
| 橋本文夫譯 ジーベツク ゲーテの世界觀 | 一・七〇 一四〇 |
| 大江精志郎著 世界觀學序想 | 一・二〇 一〇〇 |
| 岩崎勉著 人間觀と世界觀 | 一・五〇 一四〇 |
| 篠原寛二譯 カントの哲學 | 一・八〇 一四〇 |
| 佐野勝也著 カントの宗教論 | 二・〇〇 一四〇 |
| 白根孝之譯 ディルタイ教育史・教育學概論 | 二・五〇 一四〇 |
| 伊達保美著 宗教哲學研究 | 二・三〇 一四〇 |
| 大西昇著 美學及藝術學史 | 二・二〇 一四〇 |
| 曾天從著 眞理原理論 | 三・五〇 二二〇 |
| 植田清次譯 デユーキ 確實性の論究 | 二・五〇 二二〇 |
| 井伊玄太郎譯 デユルカイム社會分業論 | 三・二〇 二二〇 |
| 齋藤信治譯 ハイデツガー ヘルダーリンと詩の本質 | ・六〇 〇六〇 |
| 湯淺誠之助譯 ベツカー 美の無と藝術家の冒險性 | ・六〇 〇六〇 |
| 竹下直之著 人間學 | 一・五〇 一四〇 |
| 高橋敬視著 倫理學原論 | 一・七〇 一四〇 |
| 倉田百三著 祖國への愛と認識 | 一・五〇 一〇〇 |
| 杉森孝次郎著 國際日本の自覺 | 一・〇〇 一〇〇 |
| 溝口駒造著 將來の日本と 神道の新使命 | 一・二〇 一〇〇 |
| 理想社編 戰爭論 | ・五〇 〇九〇 |
| 增谷文雄著 佛教論 | 一・五〇 一四〇 |

760
98